

## 「いとわるき人なり」考：『枕草子』の本文批判

後藤，康文  
北海道大学大学院文学研究科助教授

<https://doi.org/10.15017/9367>

---

出版情報：語文研究. 89, pp.13-21, 2000-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 「いとわるき人なり」考

——『枕草子』の本文批判——

後 藤 康 文

## 一 仲忠・聶眞の奇妙な台詞

仲忠と涼。一条朝の宮廷において人気を二分した、『うつほ物語』の〈主人公〉たち。そして、その時代を生きた清少納言が大の仲忠・聶眞であった、とは有名な話。ところがその彼女、『枕草子』の中にも奇妙な台詞を残しているのである。

暮れぬれば、参りぬ。御前に人々と多く、殿上人などさぶらひて、物語のよきあしき、にくき所などをぞ、定めいひそしる。涼、仲忠などがごと、御前にも、おとりまさりたるほどなど仰せられける。「まづ、これはいかに。とくことわれ。仲忠の童生ひのあやしさを、せちに仰せらるるぞ」などいへば、「何か。琴なども天人の降るばかり弾き出で、いとわるき人なり。帝の御女やは得た

る」といへば、仲忠が方人ども所を得て、「さればよ」な

どいふに  
〔新大系〕・九六頁

いわゆる「返る年の二月廿余日」の段で、涼・仲忠優劣論争が起きた場面。問題となるのは傍線部の本文なのだが、田中重太郎『校本枕草子』上巻（古典文庫、昭二八）および杉山重行『三卷本枕草子本文集成』（笠間書院、平一一）によって、あらかじめこの部分の主な異同を紹介しておく、「何か」に対する「何かは」、「わるき」に対する「わろき」、「わかき」がある（二二七頁／一九四頁）。前者については即断できないけれども、三卷本系統の内部においてすら三者の対立が見られる後者に関しては、陽明文庫蔵本等の本文「わるき」がもっとも古いかたちだろう。

それでは、右傍線部本文のいったいどこが「奇妙な台詞」なのか、『枕草子』諸注の提示する解釈の検証を通してまずはその点を明らかにしてみよう。

## 二 不可解な通説

今述べたとおり、「わるき」の本文にはほかに「わるき」「わかき」の異文があるのだが、これらは、『枕草子』諸注がそれぞれの底本に選んだ伝本の〈系統〉と対応するものではない。したがってここでは、各注釈書の拠った本文が「わるき」「わるき」「わかき」のいずれであるかを基準に便宜的なグループ分けをし、傍線部本文に関する解釈の実態がいかなるものであるかを示すことにする。

### A 【「わるき人なり」の本文に拠った注釈書】

○どういたしましたして。仲忠は涼におとるものですか。なるほど涼は、琴なども、天人がききほれて降りてくるほど上手に弾きこなしましたが、でも大そうつまらない人間ですよ。  
〔全講〕・文意

○涼はきんの琴（七弦）なども天人が聞き惚れて天降る程には弾きましたが、至ってつまらぬ人です。  
〔大系〕・頭注

○どうして、仲忠が涼に劣るものですか。涼は、琴をりっぱに弾いて天人が下りるなどの奇蹟はありましたが、いたしたくない人です。  
〔旺文社文庫〕・現代語訳

○どうしてどうして。涼は琴なども天人がおりる程度に弾

いただけで、とてもさえない人です。

### 〔新全集〕・口語訳

○どうして、（仲忠が賤しいなんてことありませんよ。）琴なども（感動した）天人が下りてくるほど上手に演奏し……。（賤しいとおっしゃるなら紀伊国の吹上で成人した涼は）大変（育ちの）悪い人です。  
〔全訳注〕・現代語訳

### B 【「わるき人なり」の本文に拠った注釈書】

○涼などは、何でもありません。琴など弾いても、天人のおりる位のけちな奇特を現して、甚だつまらぬ人であります。  
〔金子〕「評釈」・口訳

○なんの涼などが仲忠と較べものになりませう。あの男は琴なども天人の天降るぐらゐに弾ける程度のもので、至つて感心できない人物です。  
〔全訳〕・口訳

○どういたしましたして。あの涼こそ、琴なども、天人が舞い下る程の弾き方をし、常軌を逸して、とてもよろしくない人です。  
〔精講〕・口訳

○なんのなんの。琴なども、（涼は）天人が舞い下りてくるほどに弾きまくるなんて、なんともつまらない人物ですわ。  
〔塩田〕「評釈」・通釈

○どうしてどうして、涼は琴なども天人がおりる程度に弾いただけで、とても劣った人です。  
〔全集〕・口語訳

○どうして（仲忠は涼に劣るでしょう、劣りはしませんよ）。涼は琴なども天人が下りるほど巧みに弾いて（いいますが、それだけであって）、まことにつまらない人です。

〔全注釈〕・通釈

○いえいえ、問題になりません。琴など弾いても、天人が降りて来た程度の奇瑞に過ぎず、はなはだ見ばえのしない人物です。

〔角川文庫〕・現代語訳

C【「わかき人なり」の本文に拠った注釈書】

○涼などは何でもありません。琴なども、天人が降りる程度に弾くだけで、ひどく未熟な人です。

〔講談社文庫〕・現代語訳

依拠した本文のいかんにかかわらず諸注に共通しているのは、仲忠ファンの清少納言が、にっくき涼を劣等未熟な人間だと切つて捨てた、と解釈している点であって、それが今日の〈通説〉になっていることが判明する。

しかし、このような解釈がその実いかに不自然なものであるかは、今時の高校生にでも簡単に見抜けるはずだ。そもそも、仲忠を擁護すればそれで済んだ清少納言なのである。その彼女に、涼を「いとわるき人なり」とまで貶しめねばならないいわれがはたしてあったのだろうか。また、もしも「琴なども天人の降るばかり弾き出で」たことが涼を誹謗する根拠だったとするなら、『うつは物語』に、

かかるほどに、涼・仲忠、御琴の音等し、右大将のぬし、

持たせ給へる南風を、帝に、「これなむ、仲忠が見給へぬ琴に侍るなり、仕うまつらせむ」と奏し給ふ。賜はりて、何心なく掻き鳴らすに、天地揺すりて響く。帝より始め奉りて、大きに驚き給ふ。仲忠、「今は限り、この琴、まさに仕うまつり静まりなむや。ねたくくちをしきに、同じくは、天地驚くばかり仕うまつらむ」と思ひぬ。涼、弥行が琴、南風に劣らぬあり、このすきの琴を、院の帝に参らす。帝、同じ声に調べて賜ふ。仲忠、かの七人の一つてふ山の師の手、涼は、弥行が琴を、少しねたう仕うまつるに、雲の上より響き、地の下よりとよみ、風・雲動きて、月・星騒ぐ。礫のやうなる氷降り、雷鳴り閃く。雪、衾のごと凝りて、降るすなはち消えぬ。仲忠、七人の人の調べたる大曲、残さず弾く。涼、弥行が大曲の音の出づる限り仕うまつる。□天人、下りて舞ふ。仲忠、琴に合はせて弾く。

朝ぼらけほのかに見れば飽かぬかな中なる乙女しはしとめなむ

帰りて、今一返り舞ひて、上りぬ。帝、御覧するに、計りなく、すべき方おぼされず。すなわち、仲忠に正四位の位賜ひて、左近中将になされぬ。涼に同じ位、同じ中将になされぬ。涼、源氏なり、琴仕うまつらざとも、この官位賜はるべし。その代はりに、祖父種松に、五位賜はりて、紀伊守になされぬ。

〔吹上・下巻／おうふう本・二九一〜二九二頁〕

と語られているとおり、当の仲忠も同罪であり、涼と同じかあるいはそれ以上に「いとわるき人」だと誹られてよい理屈にならう、等々の理由からして、この台詞はどう考えても奇妙としかいようがなく、従来の〈通説〉もまた不可解としかいようがないわけだ。——したがって、特に最近の注釈書から、

○この一文は涼を「わろし」と難じているのであろうが、現存本で見ると限りは両人の演奏によって降下したということになっておりややわかりにくい。また降下したことを難じているようにも読める。涼は天人降下ぐらいにしか弾かず、仲忠はそれによって女一宮を得たことをいう、とする説に従うべきか。〔全集〕・頭注

○吹上の下の巻、神泉苑の紅葉賀に、仲忠、涼両人の演奏に、天に異象を現じ、天人が降りて舞った。現存伝本では特に涼の演奏によってとは読めない。

〔角川文庫〕・脚注

○清少納言の言葉は、涼が天人の降りてくるほどに異常に琴を弾いて、とても感心しない人だといっているようだが、現存本文では、二人の琴の巧みさによるように書かれていて、何か誤解があるか、あるいは、当時の本文が異っていたのかも知れない。

〔和泉古典叢書〕・頭注

○宇津保物語・吹上・下に、涼と仲忠とが弾く琴にめで、天人が天下って舞った、という話がある。仲忠か涼かの一方だけが賞でられたのでもなく、また天人の天下りは「わるき人なり」の根拠たり得ず不審。「なにか：わるき人なる」と本文を改める意見もある。

〔新大系〕・脚注

といった疑問の声が聞き取れるようになったのも、むしろ当然のなりゆきであった。問題を『うつほ物語』の現存本文のあり方に引きつけて考える立場もあるけれど、ここはやはり、理解に苦しむ〈通説〉を生んだ張本Ⅱ『枕草子』の現本文の方を疑問視するのが順当なところだろう。不可解な本文は、不可解な解釈以外の何ものをももたらしはしないのである。

### 三 菟谷説とその難点

そうであってみれば、現在残っている『枕草子』の当該本文には、かならずや何らかの誤りが含まれていると判断しなければなるまい。そこで提唱されたのが、『新大系』の紹介する「なにか：わるき人なる」と本文を改める意見、すなわち菟谷朴氏の本文改訂案であった。このアイデアは、氏の論文「枕草子新見一束」〔日本文学研究〕第十四号、昭五〇・一）においてはじめて世に問われたもので、その後『集成』

に引き継がれ、「解環」ではいっその補強が図られるに至っている。

萩谷説の要点を説明すれば、諸注が「奇妙な解釈を敢えて押し通した」原因を、「何か」を「何かは」と同じく独立した反語と見て、以下を「人なり」で終止する順当な意見と見たこと」と、『宇津保』吹上巻下における神泉苑での演奏に、天人を天降らせたのは、涼一人であると誤解していること」に求め、「三巻本第一類の「なにか」とある本文に従えば」、問題の台詞には「その係りを受けて「人なる」と連体形で結ぶ、そこまでの反語の文章と、次の「帝の御女や得たる」という反語の文章と、前後二つに分かれる」構造が見て取れるので、現行の本文「人なり」を「人なる」と改訂すべきことを主張する」というもの。そして、

○「何か」の係りを受けて「人なる」と連体形で結ぶ反語の文章としてこれを解釈すれば、

どうして、琴なども、天人が天降るほどに弾いたし、（仲忠が）そんなつまらぬ人であるものですか。

と中宮の仲忠非難に直接反論したことになり、更に積極的攻撃に転じて、

（涼は、仲忠のように）帝の御娘をいただきましたか。（それご覧なさいませ）

と、仲忠が涼よりもあくまで優位に立つものと主張したことになるのである。

とする。なるほど、「る（字母留）」と「り（字母利）」との字形相似による本文転化は極めて普通のことであるし、萩谷氏の指摘する、

○音楽の徳というものが、非常に高く評価されていた当時において、（中略）天人が天降るほどの琴の秘曲の演奏ということになれば、その奏者を「つまらない人間」などと言えた道理がないし、「それだけのこと」と片付けられるようなことではあるまい。

○「何か」以下の清少納言の発言は、「仲忠が童生ひのあやしさを、切に仰せらるる」中宮のお言葉に対する直接の反論でなければならぬから、「琴なども、天人の降るばかり弾き出で、いとわるき人なり」と涼の批判をしても効果のないことである。この「いとわるき人なり」をアイロニカルな表現と見る北条忠雄氏の意見（『読書』第三号）も、その意味では成り立たない。「何か」だけでは、仲忠の弁護とはならないから、飽くまでも、天人を天降らせる程にすばらしい弾奏をした仲忠が「何か、いとわるき人なる」と、先ず、中宮に対して、仲忠の弁護を試み、更に、その仲忠に比して御門の御女をいただくことのなかった涼よりも仲忠を優位に置くという、二段階の反論が、遂に、中宮をして二の句をつげないようにしたわけである。

○清少納言が、仲忠を弁護する為とはいいいながら、天人が

天降るほどの音楽の功德を軽視したり、嵯峨院の皇子を「いとわるき人なり」と断じるような非常識なことを、中宮に対して口走るわけがないのである。

(以上『解環』)

等の論拠についても、いちいちもつともだといわねばならぬ。

ところが、この本文改訂案は『集成』『解環』を除く以後の注釈書に採用されることはなかった。その現実は、一見合理的で、これにて一件落着かと思われた萩谷説にも、にわかには賛同しがたいいくつかの難点があることを物語っている。

その第一は、萩谷氏が反語の用法とみる「何か(は)」の機能の問題で、この語は、『枕草子』内の用例でいえば、

・「(アナタハ)いみじううけばりけり。かうだにいかで時鳥のことをかけつらん」とて(中宮ガ)笑はせ給ふもはづかしながら、「何か。この歌よみ侍らじとなん思ひ侍るを。(下略)」と(清少納言ガ)まめやかに啓すれば

(「五月の御精進のほど」の段／一三三頁)

・よろこびなどいひて、「いとかしこうなり給へり」などいふいらへに、「何かは。いとことやうにほろびて侍るなれば」などいふも、いとしたり顔なり。

(「したり顔なるもの」の段／二二九頁)

などに同じく、「相手の言葉に反対したり、質問を軽く受け流す時などに使う」(『岩波古語辞典』感動詞だと判断するのが

やはり適当であり、連体形の〈結び〉は要求されていないと考えられる点。

第二は、かりに「何かういとわるき人なる」の係り結びが成立したとして、ここで中宮が問題にしているのは「仲忠が童生ひのあやしき」であった。にもかかわらず、それを否定するため何ゆえ「わるし」という形容詞を用いる必要があったのか、そのあたりの噛み合いの悪さ、必然性の乏しさに依然として強い疑問が残る点。普通に考えるなら、「何かういとあやしき人なる」とでもありたいところだ。

第三は、それでもなお、清少納言が仲忠のことを「何かういとわるき人なる」と弁護したのだとして、「ひどく」「たいそう」「ほんとうに」といった意を表す副詞「いと」がなぜわざわざ添えられているのかという点。逆のいい方をすれば、この場合「いと」はまったく不要なことばにしかならないということであって、案の定、「いとわるき人なる」の部分に与えられた萩谷氏の現代語訳も「そんな下品な人なものですか」(『集成』・傍注／『解環』・口訳)と正確ではないのである。

以上の理由から、萩谷説には与しえない。とするならば、別にどのような本文改訂の道があるのだろうか。

#### 四 原形「いとになき人」説

「いとわるき人なり」は、清少納言の仲忠に対する贊辞でなければならぬ。その点を押さえたうえで萩谷説の難点を解消できる新たな本文改訂案。——となれば、それはおそろく、ただひとつしかないだろう。すなわち、助動詞「なり」ではなく、形容詞「わるし」こそが本文転訛を疑われるべき真の対象だったのであり、「いとわるき人」を「いとになき人」の誤写だと考えるよりほかに手はあるまい、ということなのである。「わるし」ならぬ「になし」であれば、この語自体が「またとない」「この上ない」といった最大級の賞賛を表すのはもちろんのこと、後掲の用例からも知られるとおり副詞「いと」との結びつきも自然で、当該文脈にたいへんよく馴染むことになるからだ。

草仮名「な(奈)」と「る(留)」の交替は、「花」と「春」の異同に象徴されるように、われわれがしばしば遭遇する現象であるし、一方、「に(爾)」が「わ(王・和)」に誤られる可能性もまた十分にあったといえる。「な」↓「る」の誤写は枚挙に遑がないので、ここでは、「に」↓「わ」の実例を、『枕草子』の中からひとつだけ紹介しておくことにしよう。

・檳榔毛の車などは、門小さければさばかりえ入らねば、例の筵道敷きて下るるに、いとにく、腹立たしけれど

も、いかがはせん。

(九頁)

「大進生昌が家に」の段冒頭近くにある文章である。右傍線部本文に関して、能因本系統諸本で「にくく」、「校本枕冊子」上巻・二三頁)、三巻本系統では、第二類の内閣文庫蔵本(「新大系」底本)が同じく「にくく」の本文を有するのに対し、他の諸本はすべて「わくく」に作る(『三巻本枕草子本文集成』・一六頁)という対立が認められるわけだが、この箇所(原形)本文が「にくく」ないし「にくく」であることは明らかで、「わくく」の「わ」は、当然「にくく」の「に」からの転訛だと判定されねばならない。ちなみに、手もとで確認できる「わ」の字母は、三巻本系統第二類の本田本(新興社善本叢書5/新興社、昭六〇)、大東急記念文庫蔵古梓堂文庫旧蔵本(復刻日本古典文学館/ほるぶ出版、昭四九)、早稲田大学蔵本(早稲田大学資料影印叢書国書篇第三十三巻/早稲田大学出版部、平六)ともに「王」であり、特に大東急記念文庫蔵本の字形は「爾」の草体と紛らわしく、『校本枕冊子』が、

○三巻本 わくく——古・内にく、

と「に」に誤認しているのも、やむをえない過失であったといえるかもしれない。なお、参考までに記しておくならば、「わるき」「わろき」「わかき」の「わ」の字母は、三巻本系統第二類の早稲田大学蔵本、能因本系統の学習院大学蔵本(笠間影印叢刊/笠間書院、平四再版)、富岡家旧蔵本(重要



古典籍叢刊3/和泉書院、平一一)で「王」、三卷本系統第一類の陽明文庫蔵本(陽明叢書国書篇第十輯/思文閣、昭五〇)、同第二類の本田本、大東急記念文庫蔵古梓堂文庫旧蔵本で「和」である。

さて、「いとなき人」といえば、『伊勢物語』第九十三段冒頭の、

・昔、男、身は賤しくて、いとなき人を思ひかけたりけり。

(『角川文庫』・八六頁)

がただちに想起されるし、『うつほ物語』を繕げは、

・忠こそ、起き走り、出でて見るに、「いとなき行ひ人なり」と見て、忠君、伏し拝み給ふ。

(忠こそ巻/おうふう本・一二六頁)

・吹上の宮に着き給へれば、(中略)「いとなき所なりけり。いかで、かくて住むらむ」と御覧す。

(吹上・下巻/同・二八二頁)

・さて、ありがたくて、今より、しか教へ奉りたらむこそ、いとなき伝へならめ。

(楼の上・下巻/同・八八八頁)

といった、「いとなき」+名詞+断定の助動詞「なり」の形式を踏む用例たちに出会うことができる。さらに、ほかならぬ仲忠その人が、『うつほ物語』の中で、

・かかるほどに、この子(仲忠)は、すすくと、引き伸ぶるものやうに、大きになりぬ。生ひ出づるままに、

いとなきうつくしげなり。(俊蔭巻/同・三六頁)  
・侍従仲忠、いとなき装束きて、夜うち更けて出で来たり。  
(嵯峨の院巻/同・一八二頁)

と、「いとなし」をもって形容されている事実も見逃せまい。

あらためてまとめると、次の三点。  
(1)「いとわるき人」を「いとなき人」と改訂することによつてはじめて、清少納言の発言を素直に仲忠讚と受けとめることが可能になる点。

(2)形容詞「になし」は副詞「いと」との結合度が高いことばであり、現行の「わるき人」に接続したのでは納まりの悪かった「いと」の存在が、一転してごく自然なものへと変貌する点。

(3)「に(爾)↓「わ(王)」かつ「な(奈)↓「る(留)」の誤写は可能性として十分に起こりえた点。

これが、本稿の提起する新たな本文改訂案(原形「いとなき人」説の根拠であり、利点なのである。

## 五 「いとなき人」仲忠

長徳二年(九九六)二月二十六日の宵、職の御曹司に参上した清少納言は、折しも白熱していた物語批評の場で、涼・仲忠優劣論争に巻き込まれることになる。そして、中宮様が

仲忠の「童生ひのあやしき」をしきりに問題にしておられるが、と水向けられた彼女は、

何か(は)。琴なども天人の降るばかり弾き出で、いとになき人なり。帝の御女やは得たる。

すなわち、

いえいえ(そんなことは問題になりません)。(仲忠は、神泉苑で催された紅葉賀の折に)琴なども天人が天下さるほど(絶妙)に弾ききって、ほんとうにこの上ない人物です。(それに涼は、源氏であるにもかかわらず、仲忠のように)皇女を手に入れたでしょうか。

と即座に反論したのだった。

『枕草子』の作者清少納言にとって、『うつほ物語』の仲忠はあくまでも「いとになき人」であったのだ。

注1 本稿で引用ないし言及する『枕草子』諸注とその略称は以下のとおりである。なお、引用に際してはルビ等を省略した。

- 【能因本系】金子元臣『枕草子評釈』上巻(明治書院、大1) ○) ↓金子『評釈』、栗原武一郎『三段式枕草子全釈』(広文堂書店、昭二) ↓『全釈』、五十嵐力、岡一男『枕草子精講』(学燈社、昭一九) ↓『精講』、田中重太郎『枕草子全注釈』(二角川書店、昭五〇) ↓『全注釈』、川瀬一馬『講談社文庫・枕草子』上(講談社、昭六二) ↓『講談社文庫・枕草子』上(講談社、昭三〇) ↓塩田『評釈』、池田亀鑑『全講枕草子』上巻(至文堂、昭三三)

↓『全講』、池田亀鑑・岸上慎一『日本古典文学大系・枕草子』(岩波書店、昭三三) ↓『大系』、田中重太郎『旺文社文庫・現代語訳対照枕草子』上(旺文社、昭四八) ↓『旺文社文庫』、萩谷朴『新潮日本古典集成・枕草子』上(新潮社、昭五二) ↓『集成』、石田穰一『角川文庫・新版枕草子』上巻(角川書店、昭五四) ↓『角川文庫』、萩谷朴『枕草子解説』

二(同朋舎、昭五七) ↓『解環』、増田繁夫『和泉古典叢書・枕草子』(和泉書院、昭六二) ↓『和泉古典叢書』、渡辺実『新日本古典文学大系・枕草子』(岩波書店、平三三) ↓『新大系』、松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集・枕草子』(小学館、平九) ↓『新全集』、上坂信男・神作光一『講談社学術文庫・枕草子』上(講談社、平一一)。

また、本稿における『枕草子』の引用は、「底本に」三巻本系第一類の「陽明文庫蔵本を用い、その冒頭の欠損部」を同第二類の「内閣文庫蔵本を底本として補った」『新大系』の本文に拠ったが、表記等は私に改めた箇所もある。

2 「わるき」は「わるき」をより一般的な表現に改めた本文、「わかき」は「る(留)」 ↓「か(可)」のごくありふれた誤写によって生じた転訛本文と推察される。

3 ちなみに、池田亀鑑『古典的批判的処置に関する研究』第二部(岩波書店、昭一六)にも、「に(爾)」 ↓「わ(和・王)」、「わ(和・王)」 ↓「に(爾)」の誤写に関する実例がそれぞれあげられている。

(ごとう やすふみ 北海道大学大学院文学研究科助教授)